

# シンポジウム I 守るべきいのちと尊厳

10月17日(木) 10:00～12:00 第1会場(広島国際会議場 B1F フェニックスホール)

## S1-1 広島平和記念資料館の軌跡と課題

広島平和記念資料館 前館長

しが けんじ  
志賀 賢治

1945年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾が広島市の上空約600mで炸裂しました。人類史上初めて、都市とそこに暮らす人々を標的に、この恐るべき兵器が用いられた瞬間です。

原子爆弾の爆発から放たれた数千度の熱線は、一瞬にして都市を火の海と化し、猛烈な爆風は、家々をなぎ倒し、人々を押し潰しました。そして、大量の放射線は、人々の体内奥深く入り込み、今だに生き残った人々を苛み続けています。

数百年前に築かれた城下町広島は、陸軍の主要軍政機関が置かれたことにより、国内有数の軍事都市として発展しました。1894年に勃発した日清戦争を機に、宇品港(広島港)を拠点とする派兵・兵站基地としての地位を確立すると、重化学工業が盛んになります。このころ建築されたのが、現在の『原爆ドーム』、広島県物産陳列館です。

広島にはまた、高等師範学校を始めとする様々な高等教育機関が設置され、広島文理科大学では東南アジア等からの留学生も受け入れていました。

しかし、1931年に始まった中国との15年戦争、そして、太平洋戦争に突入すると、当初こそ軍事基地・軍需産業の拡充により活況を呈したものの、戦局の悪化に伴い、市民生活も次第に軍事的統制下に置かれます。生活必需品は配給制となり、戦地にいる成人男性に代わって、女性や中学生たちも軍需工場や建物疎開作業に動員されました。

あの日も、大勢の中学生たちが、中心市街地の路上で建物疎開作業に従事していたのです。

広島平和記念資料館は、その10年後の1955年に開館致しました。その原点は、被爆の翌日に遡ります。一人の地質学研究者が、熱線に溶かされた石の表面に気づき、通常の爆撃によるものではないと確信します。後に初代館長となる長岡省吾氏でした。彼は、直ちに瓦礫を拾い集め始めます。焦土を歩いて集められた資料は、その後公民館の一室で展示を始められます。

あの日きのご雲の下で一体何が起こったのか、その記憶を伝え続けることが、そのとき以来変わらぬ当館の使命です。

被爆から74年、開館から64年目を迎える当館は、収蔵資料の劣化、施設・設備の老朽化、外国人来館者サービスなど、さまざまな課題を抱えながら、開館以降3度目となる全面的な展示再整備事業に取り組み、10年に亘る作業を経て、東館、本館の順に整備し、今春全館の展示が完成いたしました。

この春開館した本館の展示は、「8月6日の惨状」、「被爆者」、二つのゾーンで構成されています。「8月6日の惨状」は、被爆者の視点で、あの日を再現することを目指しました。実物資料を中心とした展示は、あの日、あの場所に確かに存在した資料によって、声なき声で事実を伝えているはずです。「被爆者」のゾーンでは、一つ一つの遺品に、犠牲者の苦しみや遺族の悲しみ、さまざまな思いが託されていることを感じて頂けることでしょう。

また、今回新たに設置された多数の朝鮮人、中国人、アメリカ兵捕虜など外国人被爆者の被害を伝えるコーナーでは、原爆による殺戮の無差別さを改めて感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

当初、被爆した石や瓦が中心だった収蔵資料は、被爆者や遺族からの寄贈によって種類も点数も増え、現在は約2万点に上ります。加えて、調査団や米軍等が撮影した写真約7万点、市民が描いた原爆の絵約5千点を所蔵しています。

しかし、74年前数千度の熱線ととてつもない爆風に襲われ、膨大な放射線にさらされた資料は、通常の経年劣化を遥かに超える劣化度を示しています。現在広島平和記念資料館が直面する最大の課題です。